

シンガポールの教育 特に、ストリームについて

川上 昭吾* 森本 弘一** 劉 卿美*** 橋本 健夫****

*愛知教育大学 名誉教授 **奈良教育大学 教育学部
長崎大学 大学教育機能開発センター *長崎大学 教育学部

Education in Singapore – with special focus on streaming

Shogo KAWAKAMI* Koichi MORIMOTO** Kyonmi YOU*** Tateo HASHIMOTO****

*Professor Emeritus of Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Nara University of Education, Faculty of Education

Nagasaki University, Research and Development Center for Higher Education *Nagasaki University, Faculty of Education

要 約

シンガポールの学校教育に存在するストリーム制における、各ストリームに進む児童生徒数を明らかにした。小学校では5年生になるときに、母語、英語、算数で標準と基礎のコース分けがある。小学校卒業時の初等教育終了試験 PSLE によって、中学校の進むコースがエクスプレスコース（4年間）30,878人、通常/アカデミックコース（5年間）12,811人、通常/テクニカルコース（4年間）6,530人に分けられる（2008年）。中学校後は、ジュニアカレッジ30.5%、ポリテクニク41.6%、技術教育研修所22.2%に分けられる。シンガポールにはこのように激しい競争がある。ところが、わが国にあるような「いじめ」、「不登校」、「校内暴力」などはない。また、「敗者」とも言える技術教育研修所の生徒のアスピレーションはこの研修所に入学してから急速に高まったという報告がある。これは、学習者の能力に合ったカリキュラムが用意されていることに大いに関係がありそうで、わが国のすべてが平等な教育制度の在り方を検討する際の示唆となる。

Keywords：シンガポールの教育制度、ストリーム制、アスピレーション

1 目 的

シンガポールの教育は、試験の成績によって、学校やコースが決まる「ストリーム制」をとっている。この制度は、わが国の教育制度と比較すると、子どもを競争に追い込む極めて過酷な制度であるように思われる。

しかしながら、シンガポールとしての考え方は、子どもに合った教育を進めているという。

わが国では、いじめ、不登校等様々な教育問題が惹起しており、シンガポールがストリーム制で「子どもに合った教育をしている」とすれば、わが国も大いに参考にすることができる。

このような観点からシンガポールの教育のあり方を調査した。

まず競争の観点から制度を概観してみよう。

シンガポールでは、小学校、中学校の学区はあるが、条件を満たせば他の学区の学校に進むことができる。ここで先ず一つの競争が生じている。

小学校6年の卒業時に「PSLE」と呼ばれる「初等教育終了試験 Primary School Leaving Examination」が全員に課され、その成績で中学校での学習コースが決められる。小学校毎のテストの結果は各学校ホームページに掲載される。「PSLE」の成績次第では、中高一貫校への進学や人気がある中等教育学校への進学の道があり、シンガポールの小学生は「PSLE」で良い成績をとるために宿題と自主学習に追われている。さらに小学校では留年がとられることもある。

中学校では大部分の生徒は4年間で卒業するが、一部の者は5年間の中学校教育を受けることができるようになる。中学校も各種教育コンクールの成果がホームページに掲載される。各中学校は生徒の成績の高さ

を競っているようである。

また、総合教育学校と呼ばれるわが国の「中高一貫校」に相当する学校があり、なかなかのエリート校である。そのうちの「シンガポール大学附属数理高校」は時代を反映して数学と科学に特化して新たに創設された人気校である。

後期中等教育を代表するのが「ジュニアカレッジ」と呼ばれる2年間の大学前学校である。各ジュニアカレッジはシンガポール・ケンブリッジ上級試験 GCE の A レベルに到達した生徒数を競っている。

後期中等教育には、ジュニアカレッジ以外には「ポリテクニク」と「技術教育研修所」がある。

このようにシンガポールの教育は、「激烈な競争による教育」が進められている印象を受ける。

これはわが国の中学校までは平等な制度と比較すると、子どもに対して競争を強いた制度と受け止められる。幼少の頃から成績により選別することが疑問に思われるのである。しかし、過酷ハードな反面、子どもの能力に対応しながらこの制度を進めているという柔軟なソフトな部分がある。

振り返ってわが国の教育を顧みると、衆知のように様々な問題を抱えている。すなわち、1学級あたりの子どもの数は先進国だけでなく世界的にみても多い。「小1プロブレム」、「中1ギャップ」があり、「学級崩壊」も起きている。「クレマー」とか「モンスター」と呼ばれる理不尽な要求を学校に突きつける保護者が増えている。いじめや校内暴力も多い。不登校の児童生徒数も多く、特に中学校では深刻な人数になっている。学校に来ることができないのは教師にも広がっている。学校の外での犯罪行為も増えている。高等学校の退学者も多い。極端な例としては殺人すら起きている。

このように、わが国教育には解決すべき問題が山積しており、それが解決できない「閉塞状況」にある。

ところが、シンガポールの教育についてみると、学校で競争が激しいにもかかわらず、不登校の児童・生徒はいない。統計的にそれを示すデータは存在しない。このことを奇異に思い、シンガポール文部省の担当前職者と現職者に尋ねたところ「不登校はない」ということであった。シンガポール文部省の正式ホームページには学校教育のあらゆる情報が公開されているが、不登校の子どもの数を調査したデータは「見つけることができない」のではなく、調査をする必要がないためにそのデータが存在しないのである。

国民が感じる学校の教育活動の意義は、社会の発達とも無縁ではない。したがって、シンガポールの教育の一面を見てそれを良しとすることができないが、大いに参考にすべきことがあると思う。

そこで、本論はシンガポールのストリームの実態を把握し、わが国教育の参考にすることを目的とする。

2 シンガポール国の概要

シンガポールの面積は707平方キロメートルで、東京23区(約700平方キロメートル)とほぼ同じ広さである。

人口は、2009年現在約499万人である。内訳は、国民が64%320万人、外国人36%179万人(外国人永住者11%、企業駐在員や出稼ぎ労働者などの外国人非定住者が25%)である。合計特殊出生率は、2008年は1.28と、日本よりも少子化が深刻となっている。このためシンガポール政府は、経済成長を支えるため、移民や外国人労働者の受け入れを進め、40～50年後に総人口を650万人に増やす計画である。

シンガポールは多民族が共存している。中華系が75%、マレー系14%、インド系9%、その他2%である。

使用言語は、国語は「マレー語」である。公用語として英語、中国語、マレー語、タミール語を使っている。多民族国家であり、それぞれの民族の文化をしっかりと守ることが国の基本にある。しかし、実態としては、英語が日常的に使われている。

国の産業は、エレクトロニクス、化学関連、バイオメディカル、輸送機器、精密機械などの製造業、商業、ビジネスサービス業、運輸・通信業、金融サービス業、観光などである。ここに「農業」はなく、食料品はすべて輸入に頼っている。

GDPは国民一人あたり35,163米ドルで、わが国の国民一人あたりのGDPとほぼ等しい(2007年)。

国家予算は550億シンガポールドル(2008年)、その内教育費は80億ドルで、国家予算に占める教育費は14.5%である。ちなみにわが国の文部科学省の予算は5.7%である(2009年度)。

3 教育制度

シンガポールの教育制度は図1のようである。シンガポールの教育制度を示す図は、シンガポール文部省のホームページに示されているし¹⁾、これまでも各所で紹介されている^{2~5)}。これまで紹介されているものは、小学校の4年から5年になるときにストリームEM1、EM2及びEM3に分ける制度である。この制度が廃止されたのは2004年であり、2005年からの新しい制度を紹介しているのは文献6、7、8である^{6~8)}。

しかし、新しい制度を紹介した文献6、7、8においても、進路毎の子どもの数を明示したものはない。そこで、図1にはストリームの実態がわかるように、学校種別、コース別の児童・生徒数も入れた。このように人数も含めて競争の実態が明らかになるような図は、はじめて紹介されるものである。

(1) 初等学校

初等学校（6年間）は177校ある。内訳は、国立校（Government）130校、国立補助校（Government-aided）46校と独立校（Independent）1校である。2008年の初等学校の総児童数は272,097人である。教員1人あたりの児童数は21.4人で、平均クラスサイズは34.5人である。

①初等教育は、多くの児童は6歳から11歳までである。ところが、2008年のデータをみると、6年生の総数50,146人であるが、年齢別には11歳の児童は47,093人であるが、12歳から15歳までの児童も3,048人在籍している¹⁰⁾。つまり、留年があるということで、この点が国の進級制度と違うことがわかる。

初等教育の主要科目は、英語、第二外国語（母語）、及び算数である。この3科目は5年生になると児童の能力に応じて標準 Standard と基礎 Foundation に分けて教えられる。

小学校から能力に応じた教育を進めることが、子どもの発達に応じたものであるかどうかは価値観の分かれるところである。

6学年終了時には、すべての生徒を対象とした初等教育終了試験 PSLE（Primary School Leaving Examination）が実施される。初等教育終了試験は、学習進度と適性に合った中等教育コースで教育するための学力評価試験である。必要な基準に到達した場合、中等学校の①エクスプレスコース、②通常／アカデミックコース、及び③通常／テクニカルコースに分けて入学する。この3コースは一般的に「メインストリーム」とよばれるが、コースの区別があることは歴然としている。なお、メインストリームの他、職業コースが用意されている。

PSLE 初等教育終了試験は自分が進むストリームを決める極めて重要な性格を持つ。

その試験の内容は、標準科目は英語、第二外国語（母語）、算数、理科の4科目である。これに上級母語がある。

また、英語と算数については基礎英語と基礎算数も用意されており、これらは標準の英語と算数と同じ時間帯で実施される。

2009年のPSLEは、8月20日と21日に「会話」、9月19日に「聞き取り」が行われた。筆記試験は10月7日～13日まで実施され、7日は英語または基礎英語、8日は数学または基礎数学、9日（金曜日）は母語、12日（月曜日）は理科、13日は上級母語が実施された。

2008年のPSLEは98.1%の通過率である。

(2) 中等学校

中等学校（4年または5年間）は170校（国立校125校、国立補助校32校、独立校13校）である。

中等教育では、生徒は上述のような初等教育終了試

験の成績によって①エクスプレスコース、②通常／アカデミックコース、及び③通常／テクニカルコースに分けられる。各コースのカリキュラムは生徒の能力と興味に応じて異なる。この点がわが国の制度と異なっている。

2008年の進路は、シンガポール文部省発行の資料によれば、「メインストリーム」に進んだ生徒総数は50,219人で、この内エクスプレスコース30,878人（61.5%）、通常／アカデミックコース12,811人（25.5%）、及び通常／テクニカルコースは6,530人（13.0%）である。

②エクスプレスコース

このコースはシンガポールの生徒の大部分（2008年は61.5%）が進み、4年間で終了する。シンガポール・ケンブリッジ「標準」教育認定（GCE'N'）を受ける必要がなく、「普通」Ordinary教育認定（GCE'O'）レベルの試験を受ける。Oレベルの試験は語学が中心で、理科では「生物」が課されている。試験の内容は、下記ホームページに示されている。<http://www.seab.gov.sg/SEAB/oLevel/2009GCETimetable.pdf>

GCE'O' レベル試験で優秀な成績をおさめた者は、ジュニア・カレッジ、教育学院やポリテクニク、職業訓練校に進学する事ができる。判定は、GCE'O' レベル試験の総得点から計算されるポイントをもとに決められる。

この試験に、理科関係科目では、化学と生物の実験が課されている。

③通常／アカデミックコース・通常／テクニカルコース

アカデミックコースは教科中心、テクニカルコースは体験重視のカリキュラムが用意されている。

4年終了時に両コースの全員がシンガポール・ケンブリッジ「標準」Normal教育認定（GCE'N'）レベルを受ける。

この試験の内容は、ほとんどが語学であり、理科や数学は含まれない。

アカデミックコースの7～8割の者は、シンガポール・ケンブリッジ「普通」Ordinary教育認定（GCE'O'）レベルの試験を受ける。なお、一部の生徒（2008年は9,561人である）は中等5年に進み、中等教育レベルに到達することをめざす。

なお、学校によっては、エクスプレスコースの生徒がほとんどを占める学校もあり、それらは人気校である。同じく人気校である④総合教育学校・IP校（後述）とともに、そこを目指した激しい入試競争がある。

④芸術、音楽、言語などに格別な意欲を持つ者への学校もある。

以上の中等学校の生徒総数（2008年）は201,531人である。

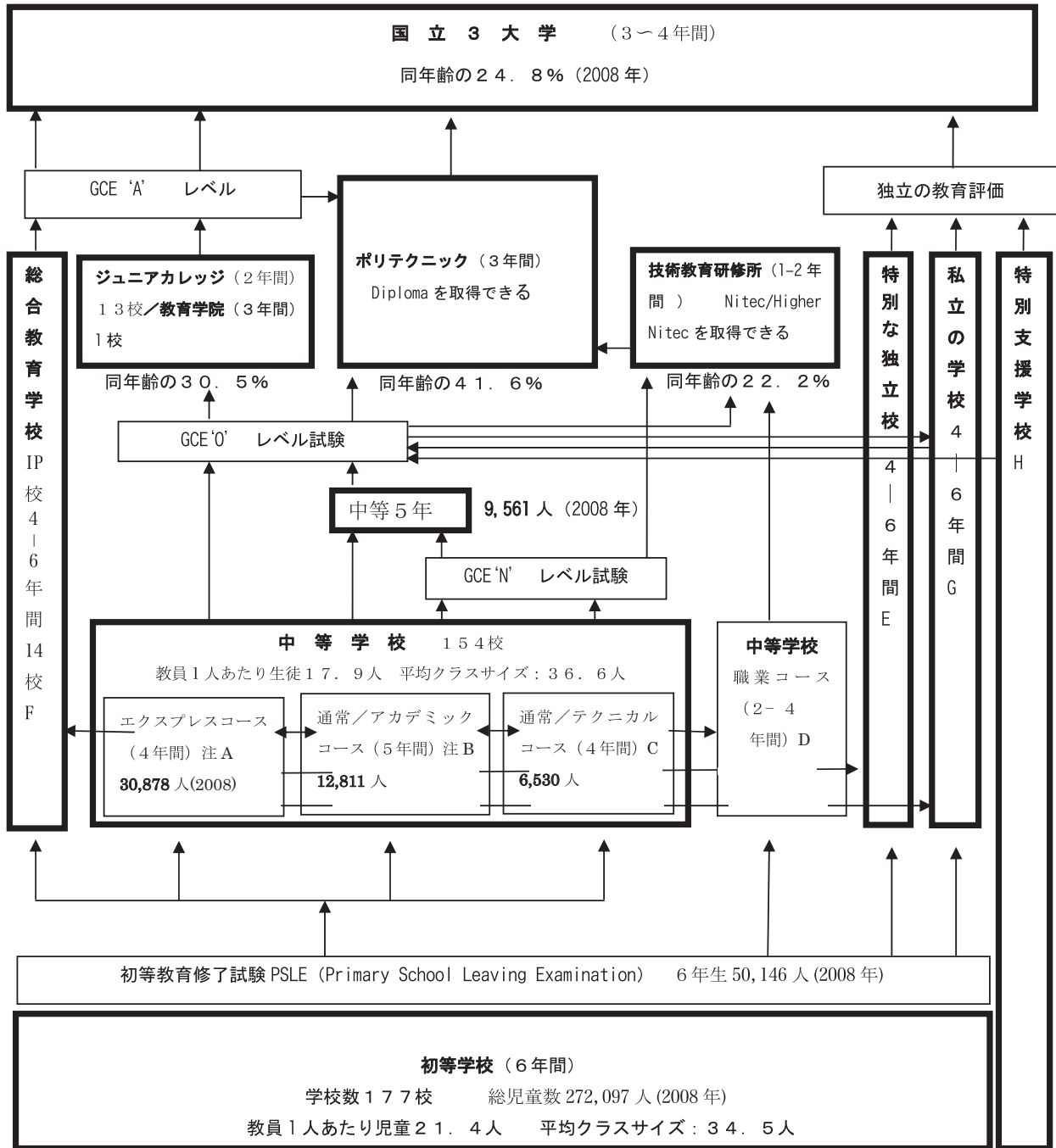


図1 シンガポールの教育制度

注) A : GCE'O' レベル試験の受験をめざすコースである。このコースでは英語と母語、数学、理科、人文学を学習する。 B : GCE'N' レベル試験の受験をめざすコースである。GCE'N' レベル試験で優秀な成績を修めて GCE'O' レベル試験をめざしてさらに1年間学習するコースか、2007年から始まった高等 Nitec コースに進む。学習内容はエキスプレスコースと同様である。 C : GCE'N' レベル試験の受験をめざすコースである。このコースでは、英語と母語、数学と技術や実技科目を学習する。 D : このコースには2007年に Northlight School が創設された。3-4年間で、職業教育が用意されている。 E : 芸術、音楽、言語等特殊な分野に優秀な能力を育てる特別なプログラムを持つ学校 F : 明確に大学を指向した生徒を受け入れる総合教育学校・IP 校(Integrated Programme)。この中には次の3種類がある。i) 初等と中等が一体化した学校(3校)、ii) 中等学校とジュニアカレッジを結びつけた9校。これはカリキュラムに独自性を持ち、各種の国家試験が免除されている。iii) 後期中等学校とジュニアカレッジを結びつけた2校 G : 独自のカリキュラムをもつ私立学校 H : 特別な支援が必要な生徒

⑤総合教育学校・IP校

最近のシンガポールの教育改革を強く印象づける総合教育学校・IP校（Integrated Programme School、4～6年間）が11校（国立校5校、独立校6校）ある。これはわが国の中高一貫校と同じである。国立校としては、Dunman High School, National Junior College, River Valley High School, Temasek Junior College, Victoria Junior Collegeの5校である。独立校として、Anglo-Chinese, Hwa Chong Institution, NUS High School of Mathematics and Science, Raffles Institution, Nanyang Girls' High School, Raffles Girls' Schoolの6校がある。この内 Temasek Junior College と Victoria Junior College は後期中等教育2年間とジュニアカレッジ2年間をあわせた4年制であるが、その他の9校は6年制である。

これらの学校は大学進学を指向する生徒を受け入れており、中等学校の生徒が必ず受験しなければならない GCE'O' レベル試験は免除されている。

なお、これら11校は上記中等学校とジュニアカレッジの両方にカウントもされている。

IP校には、以上の他、初等教育と中等教育を結びつけたスタイルの学校が3校ある。

以上14校の総生徒数は30,981人である（2008年）。

(3) ジュニア・カレッジ

ジュニア・カレッジ（Junior Colleges、2年間）は21校（国立校13校、国立補助校4校、独立校4校）である。この他、教育学院（Centralised Institute、3年間）が1校ある。これは、2000年記念事業の一環として2004年に創設され、学校の名前は Millennium Institute (MI) である。生徒数は多くない。

これらの大学前教育終了時には、シンガポール・ケンブリッジ上級教育認定（GCE'A'）レベルの試験が行われる。

ジュニアカレッジにも人気校（人気の順位）は存在する。

これらの学校の生徒総数は24,323人である（2008年）。

(4) 技術教育研修所

17歳から20歳を標準として技術教育を行っている。

(5) ポリテクニク

ポリテクニク5校は、シンガポールの教育制度では中等教育以降の教育に位置づけられている。ポリテクニクには、工学、ビジネス研究、会計、海事研究、マスコミ、看護、バイオテクノロジー、化学工学、デジタルメディアデザイン、応用科学、製品デザイン、情報通信など多岐にわたるコースが用意されている。

(6) 大学

この国の国立大学は、シンガポール国立大学、ナンヤン（南洋）工科大学、シンガポール経営大学の3校である。この他、私立大学やアメリカの大学の分校等もある。

学校教育に関係するのはナンヤン（南洋）工科大学である。この大学は、工学課程、会計・経営、コミュニケーション研究などの新学部をもつ。そして、国立教育研究所（NIE）を併設し、教員志望者のための教員養成プログラムや現任教員のための研修プログラムを実施している。

私立大学は9大学ある。総合的な教育課程を有する大学が1校、その他の8大学はビジネス、ゲームソフト開発、工学、マネジメント、芸術、ホスピタリティなどを専門とする大学である。これらは、アメリカの大学の分校が多く、フランス、ドイツ、ドバイなどの大学の分校もある。

4 教員・クラスサイズ

2008年の教員数は、初等学校13,023人、中等学校12,143人、ジュニアカレッジ・教育学院2,728人、合計27,894人である。

初等学校の教員（校長、教頭を除く）の内、修士の学位を持つ者は381人で2.9%、中等学校で修士を持つ者は1,070人、8.8%である。博士の学位を持つ者も30人いる。ジュニアカレッジ・教育学院の場合、修士取得者は458人16.8%、博士は32人1.2%である。

初等学校の一人あたりの教員に対する児童数は21.4人で、平均クラスサイズは34.5人である。

中等学校の教員一人あたりの生徒数は17.9人で、1クラスの生徒数は36.6人である。

ジュニアカレッジ・教育学院の1クラスの生徒数は23.1人である。

5 シラバス

シンガポールの教育課程は、ストリームに応じて設けられている点が、わが国の小学校と中学校の学習指導要領が一種類である点と大きく異なっている。

シラバスの多様性について見てみよう。

(1) 小学校

小学校は5年生までは、同じシラバスを使う。すなわち、美術、市民生活と道徳、健康、音楽、体育、社会、母語（中国語・マレー語・タミール語）と英語、算数、理科のシラバスがある。

この内、母語、英語、算数については、それぞれ標準用と基礎用のシラバスがある。

2004年までは4年生が修了する時点でストリーム

分けの試験が課されていたが、2005年以降はその制度は廃止され、これらの教科毎に標準と基礎があることになった。

そして、PSLE 初等教育終了試験では、標準と基礎に対応しているから、シンガポールでは事実上5年生からコース分けが始まるのである。

(2) 中学校

中学校では、基本的には①エクスプレスコースと②通常／アカデミックコースのシラバスは同じである。③通常／テクニカルコースにはこのためのシラバスが別に存在する。

6 考 察

シンガポールでは小学校5年生で母語、英語、算数について、標準の科目を履修するか基礎科目を履修するか分けられる。

中等学校に進む段階のPSLE 初等教育終了試験によって、61.5% (30,878人) が①エクスプレスコースに進み、25.5% (12,811人) が②通常／アカデミックコースに進む。そして、13.0%、6,500人は③通常／テクニカルコースとなる。多くの生徒が中等学校を4年間で卒業する中で9,511人が中等教育学校5年目を学習する。

そして、30.5%の生徒しかジュニアカレッジ・教育学院に進学できないで、大部分の41.6%の生徒がポリテクニクに進む。そして、技術教育研修所に進むものも22.2%とかなりの割合である。つまり、全体の24.8%の者が大学に進学する。

これは非常に激しい進学競争が行われているということである。シンガポールの小学生は宿題と自主学習に追われた生活を強いられている。

したがって、仲谷祥子(1997)の「幼児期から始まる熾烈な競争教育は、発達期の子ども達に大きなプレッシャーとなっていることは間違いない」と指摘することは理解できるのである。

しかしながら、シンガポールの教育の特質は、成績で区別をしたあとのフォローがきちんとしている。小学校の母語、英語、算数では5年生になれば基礎科目が用意されている。そして個の能力に即応した教育をしている。わが国の教育では全員が学習指導要領を目標とし、全員が一斉に授業に望んで平等を旨としている制度とは大きく異なる。

シンガポールは、別の見方をすれば、個の能力を大切にしているということである。筆者の一人川上は、1999年以來³⁾、日本で開催された3回のシンポジウムにコー氏とシャー氏を招聘し、またシンガポールの調査を数回にわたり行うなど、研究交流を密に進めてシンガポールの教育をみてきた。コー氏(前シンガポ

ル文部省勤務)も、シャー氏(現シンガポール文部省勤務)も、現在の制度は子どもの能力にあった教育を提供し、子どもの能力を効果的に啓発できるとシンガポールの教育制度に自信をもっている。

競争に敗れたシンガポールの子ども達が非行に走っているというデータはない。

学校に不登校の子どもはいない。

何よりも興味あるデータが、シンガポール人のシム・チュン・キャット(2004)によってわが国で報告されている。それは、いわば「敗者」である技術教育校の学生を調査したものである。それによれば、「ジュニアカレッジの生徒のアスピレーション※が徐々に高まっているのに対し、技術教育校の生徒はこの学校に入学した後にアスピレーションが急速に高まった」ことが示されている¹⁾。

(※著者注：アスピレーションとは「自己向上心」が最も近い日本語であるように思われる。)

この調査結果によれば、激しい競争の敗者達は打ちのめされて人生をあきらめているのではない。

シンガポールの教育が本当に個々の子どもに最適なものなのか、人間性豊かに育てているのか、幼少からの競争で子どもたちはストレスを抱えているのではないか、その中でいじめや不登校はどうか、筆者らはまだまだ理解が不十分である。

翻って、わが国の教育を顧みれば、平等ではあるが現実的にはわからない子どもへの補充教育が充分にできないままの教育を進めているのではないだろうか。

シム・チュン・キャット(2004)は15ページに及ぶ長大な論文の末尾を次のように結んでいる。すなわち、「シンガポールでは、より高い学歴を得るルートを、アカデミックな評価基準に代わり、技術能力を基準にすることで、「敗者」≒低い階層出身者にも「どうにかなる」という意識をつくり出している。このITE(筆者ら注：技術教育校のこと)の果たしている役割をみなおすことは、日本の現状打破の一助となるかもしれない。」

シンガポール人の指摘する上記のことが、非常に示唆に富む言葉として飛び込んできて、首肯せざるを得なくなる。

閉塞状況にあるわが国の教育を、シンガポールの教育に学び、子どもの力に合った国語と算数を進めることを検討すべきではないかと考える。

【付 記】

本研究は科学研究費補助金(基盤研究(B))、課題番号：20402064、研究代表者：川上昭吾(平成20、21年度)・遠西昭壽(平成22年度)により進められた。

【文献と注】

- 1) シンガポールの教育の概要は下記のホームページに掲載されている。
<http://www.moe.gov.sg/about/files/moe-corporate-brochure.pdf>
- 2) 仲谷祥子、「シンガポールの若者を取りまく社会環境」、高岡短期大学紀要、第10巻、pp.121-131, 1997.
- 3) Koh, Thiam-Seng and Cheah, Horn Mun, "Present situation and problems in the future of science education of Singapore" in *Repots of International symposiumon science education*, pp.157-175, 1999.
- 4) 三宅征夫、「シンガポールの科学教育課程制度」、『平成10~12年度科学研究補助金研究報告書』（国立教育研究所）、2001.
- 5) 寺田安孝・川上昭吾、「シンガポールにおける理科の授業構成の特性と課題」、『理科の教育』（東洋館出版社発行）Vol.50,No.3, pp.20-23, 2001.
- 6) 国立教育政策研究所、「理科系教科のカリキュラムの改善に関する研究」所収「シンガポール」、pp.43-62, 2003.
- 7) Koh, Thiam-Seng and Cheah, Horn Mun, "Recent development in Singapore education with particular focus on science education" (和文要約), *J. R. in Sci. Educ.*, Vol.47,No.3, pp.63-70, 2007.
- 8) 川上昭吾、「諸外国の教育課程 (2) シンガポールの理科」、国立教育政策研究所報告書、321-322、国立教育政策研究所、2007.
- 9) Cheah Horn-Mun, Poon Chew-Leng and Koh Thiam-Seng, "Preparing science students for the future in Singapore" (和文要約), *J. R. in Sci. Educ.*, Vol.50,No.1, pp.93-104, 2009.
- 10) Ministry of Education, Singapore, "Education Statistics Digest 2009", <http://www.moe.gov.sg/education/education-statistics-digest/>
- 11) シム・チュン・キャット、「シンガポールの教育とメリトクラシーに関する社会学的研究－再加熱装置としての技術教育校」、教育社会学研究第74集、pp.269-288, 2004.

【Abstract】

The education system of Singapore is characterized by "streaming". In this paper, the number of students separated into each stream is reported. In Singapore, prior to starting Primary 5, children are divided into either Standard or Foundation Courses in the following subjects: Mother Tongue, English and Mathematics. At the end of primary education, all pupils are subject to the Primary School Leaving Examination (PSLE). Then they are streamed into the following courses of secondary education according to the PSLE results: 30,878 students in the 4-year Express Course; 12,811 in the 5-year Normal (Academic) Course; 6,530 in the 4-year Normal (Technical) Course (2008). After secondary schools, they are further streamed into Junior Colleges (30.5%), Polytechnics (41.6%) and Institutes of Technical Education (ITE) (22.2%). This means that there is fierce competition among Singaporean students. However, in Singapore there are none of the problems such as 'bullying', 'truancy' or 'school violence' that occur in Japan. Furthermore, it was reported that the aspirations of ITE students - the 'losers' in the competition - have rapidly increased after enrollment in the school. This seems to be closely connected with the fact that a variety of curricula are offered to meet the learner's ability, which is highly suggestive in reviewing the Japanese education system firmly and entirely based on the principle of equality.

Keywords : Education system on Singapore, Streaming, Aspiration